



地域保健ボランティア（左）の活動を優しく見守るフィリピン赤スタッフ（右）

セブ通信

フィリピン・セブ島北部地域保健
衛生事業の現場から

vol. 3

2017. 11. 30 田村 由美

地域保健活動の出発点

11月のある日、ギビットニルという村の集会所に8人の村人が集まりました。子供連れのお母さんいれば、よく日焼けしたたくましい青年もいます。彼らはこの村の「地域保健ボランティア」です。

いよいよ活動開始！

ボランティアの1人ジュリエットは、さっそくかばんからノートを取り出しました。ノートには村の地区ごとの地形や村人の生計手段、宗教、強みや弱みが表にびっしり書かれています。先月の研修で習ったとおり、村のアセスメントに必要な項目について自分たちで調査した結果です。フィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）スタッフにいくつか質問をして表を完成させると、彼女はそれを模造紙にまとめる作業に取りかかりました。そこへ、絵の得意なベンソンが遅れてやってきました。ジュリエットが「何してんの！もうとくに始めてるで！」と笑顔でベンソンにペンを渡すと、彼は「えっ、これ山ちゃうで、岩やで。そう見えるやろ？」などと言いつつ表に地形の絵をどんどん描いていきます。

その隣でギビットニルの地図を書いているのは、5歳の子どもを連れてメッルーナです。子どもがいたずらしないように目を光らせながらも、見本を見ながら真剣な面持ちで模造紙に地図を書き写しています。

自分たちの手で地域の健康を守る

ギビットニルは南北約3km、東西約1.5kmの小さな島で、約450世帯2,000人が住んでいます。島に病院はなく、村に唯一ある小さな簡易診療所を助産師1名とヘルスワーカーと呼ばれる職員4名が交代で守っています。病気にならないよう、健康に過ごせるよう、予防を行うことが重要です。ボランティアはこれから約1か月をかけ

て7つの方法を用いて地域アセスメントをし、取り組む健康問題を決めて、村人への健康教育を進めていきます。

そんな彼らに「地図は北を上にして書いて」「模造紙を5等分するんだったら、こうしたらいいよ」とアドバイスをするのは、フィリピン赤のスタッフです。私も「この村には5つの地区があるのに、表には4つしか書かないのはなんで？」「どの地区にも港はあるの？」と質問して、村についての情報を得て一緒に考えます。でも、主となるのはあくまでボランティアです。図や表にまとめるのに慣れていない彼らを見て、「ちょっと貸して！」と言ってぱとやってしまいたい気持ちになるときもありますが、そこは我慢です。彼らが考えて彼らの手でやることにとても大きな意義があるし、2年間の事業が終わればいなくなってしまう日本人の要員がやっちゃっては意味がないと思うのです。それに地域のことを一番よく知っているのは、他でもない彼らだからです。

派遣要員として何ができるか

私は看護師になってからずっと病院で働いてきました。地域というフィールドで働くのは、今回が初めてです。事業地に行ってみて、ボランティアと直接関わってみて、今まで漠然としていた自分の役割が少しずつ見えてきた気がします。主役であるボランティアに知識や技術を伝え、動機づけ、活動を支える。そのためには、看護師としての知識や経験はもちろん大切ですが、人々に受け入れられやすい関係を築くことが何よりも必要と感じています。どんな暮らしをしているのか、どのように地域保健活動が行われているのか、フィリピンの人々から毎日多くのことを学んでいます。それらを生かして、看護師として、日本人として、何か1つでも人々の役に立ちたいと思いながら過ごしています。



離島への交通手段 バンカーボート

私が訪問した日は天気はよかったです。それでもしっかりつかまっていないと海に投げ出されそうなこともあるほど、ボートは揺れます。周りにはきれいな海が広がりますが、出港したら写真を撮る余裕なんてありません（汗）。この地域保健衛生事業では、ギビットニルのような離島も含む15の村で活動を行っています。



ギビットニルから見える対岸

本土はあんなに近くに見えるけれど…

ギビットニルからセブ島本土へはバンカーボートで30分かかり、天気の悪い日にはもちろんボートは出ません。もしギビットニルで大ケガをしたら、通院しなければならない病気になったら、そうならないように、もしそうなるも応急処置ができるように、これから健康教育や救急法講習を行っています。